ライバル物語

青地　晨　著

河出新書
158

青地　晨

本名青木滋，評論家，東京都練馬区貫井町 368，明治42年佐賀生，文化学院文学部卒，元中央公論編集次長，世界評論編集長．主要著作「反逆者列伝」

ライバル物語　　河出新書

昭和30年12月25日　第1刷発行　　¥ 100

著者　青地（あおち）　晨（しん）

東京都千代田区神田小川町3—8
発行者　河出孝雄

東京都千代田区神田錦町3—26
印刷者　小笠原秀雄

発行所　東京都千代田区神田小川町3—8　株式会社　河出書房

秀好堂印刷　　落丁本・乱丁本はお取替えいたします

ライバル物語

青地　晨著

河出新書

裝幀

庫田

發

目次

早稲田大学と慶応義塾……六
日本女子大と東京女子大……三九
朝日新聞と毎日新聞……五九
文学座と俳優座……八七
文化とドレメ……一一三
池坊と草月流……一三三
宝塚歌劇と松竹歌劇……一六〇
巨人と阪神……一八一
あとがき……二〇七

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ライバル物語

早稲田大学と慶応義塾

早慶草分け時代　早稲田の蛮カラ、慶応のハイカラは一応、世間の通り相場である。ところが草分けごろの慶応義塾は、ハイカラとは大分縁が遠かった。

奥州戦争から帰ってきて、そのまま入塾した九州っぽや土佐っぽどもが、朱鞘の大小を横たえ、朝晩、喧嘩口論の花をさかせた。何某という乱暴者がいて、会津で分捕った女の赤い着物をきていばって歩いていたという時代である。

これには福沢諭吉も大いに手をやいたとみえ、三田に移った翌年には、合計百十八カ条におよぶ『慶応義塾社中の約束』という小冊子を配っている。この『社中の約束』なるものは、教授法から塾生の起居動作の細目におよび、塾風一新を思いたった福沢の決心がなみなみならぬものだったことを語っている。とりわけ落書禁止のくだりがあって、障子や行燈に落書があろうものなら、福沢は容赦なく破りすてた。

あるとき、彼が寄宿舎を見廻っていると、桐の枕にいかがわしい落書がしてあった。女色に潔癖な福沢のことだ、いきなり枕をとって両足で踏みつぶしてしまった。「その権幕はどうも

撃ちそうな攫みかかりそうな気色で、口の法螺(ほら)ではなくして、身体の法螺で吹き倒してしまった」と彼自身、『福翁自伝』に書いている。

福沢は居合い抜きの達人で、銅貨を空中にほうりあげ、落ちてくるところを真二つに斬るほどの腕前だった。身体の法螺にも、ちゃんと裏づけがあったわけである。この調子でぴしぴし取締ったから、血なまぐさい若武者どもも恐れいって、すっかり福沢のいうことをきくようになった。

そのころ西郷隆盛が「福沢の所へゆくなら、身なりに気をつけてゆけ」と門下生を戒めたという話がのこっている。ここにも塾風革新の一端を知ることができる。西郷が征韓論に敗れて故山に帰ったのは、明治六年のことである。したがって、わずか一、二年でこれだけの成績をあげたわけだ。

塾生のあいだに縞の着物に角帯、雪駄ばきという商家の若旦那めいた服装がはやったのは、おそらく、こののちのことからではあるまいか。後年、早稲田の学生が、黒木綿の紋付きに白の兵児帯をしめ、朴歯の下駄をがらんがらんとひきずって歩いた壮士風の風俗とは、大きな開きができたわけである。

慶応義塾の創始者福沢が、大阪の蘭学者緒方洪庵塾から上京して築地鉄砲洲（今の聖ルカ病院あたり）に家塾を開いたのは、安政五年の十月の某日である。六畳の空部屋に三畳だけ畳が敷いてあるとい

う貧寒さで、したがって何日開校というレッキとした記録が残っているわけではない。明治四年、ようやく門弟の数が三百人をこえたので、三田の旧島原藩邸の払下げをうけて移った。数年空家になっていたので邸内の藪で雉子が卵をかえし、夜になると狐が鳴いた。そのころは今の国電田町駅附近まで海がせまり、三田山上から東京湾が一目に見えた。どろどろに濁った海、煤煙にくもった今の東京では想像もできない清潔な風景だったのである。

国木田独歩の自伝風の小品『あの時分』のなかに、早稲田のタンボで雁を釣った話がかいてある。その頃は早稲田界隈は一面のタンボで、夜になると雁がおりた。その雁を釣針にミミズをつけて釣るのである。タンボの中に茶畑、茗荷畑、雑木林が点在し、枯ススキが白い穂先を秋風になびかせていた。独歩が早稲田大学の前身、東京専門学校に学んだのは、明治二十四、五年の頃で、開校からおよそ十年ぐらいのちのことであった。

東京専門学校の開校は明治十五年十月二十一日。その前年の秋に、明治十四年のクーデターがおこった。そのために大隈重信は一夜にして参議の地位をおわれ、同志とともに野にくだった。政府と政商がぐるになった大疑獄事件を、民論を背景に大隈が攻撃したこと、イギリス流の政党内閣制を日本にしこうとしたこと、この二つが政変のおもな原因であった。つまり伊藤博文、黒田清隆等の薩長藩閥と岩倉具視等の天皇側近勢力が連合して、ただ一人の進歩派の大隈を閣外に追放したのである。イギリス流の立憲思想を大隈に吹きこんだのは、誰あろう福

沢諭吉であった。福沢が大隈の思想的ブレーンであったことは、歴史というものの複雑微妙さを、まざまざと思わせる一事である。

東京専門学校の設立までには、こうしたいきさつがあったから、藩閥政府は大隈の学校を白眼視したことはいうまでもない。まるで西南の乱の口火をきった西郷の私学校が、東京に復活したかのように疑った。

西郷の私学校はたしかに不平士族を中心とする地方軍閥の養成機関だった。しかしイギリス流の民権思想の流れをくむ大隈の学校を私学校同様に考えたのは、たしかにスネに傷もつ政府の弱味である。

「あれは尚武的な学校、これは文治的であるけれども、物騒の差は同じ程度と見た」とは創立以来五十年を早稲田とともに歩いた高田早苗の思い出話である。「そこで政府は、この学校を目して謀叛人養成所となし、始終探偵が附きまとうているという始末で、この探偵共は碌な報告をきかせなかったに相違ない。政府は密かにその意を各地方長官に伝えた。地方官は父兄に向って子弟を大隈の学校に入れてはならないと極力説いたので、官僚の邪魔が入って入学者は甚だ少い。……僅か八十人という次第」とも後年大隈は語っている。これをみれば、大学に警官やスパイを放つのは、明治初年以来の日本政府の〝光栄ある伝統〟だったことがよくわかる。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

政府はさらにおい撃ちをかけ、官吏が私立学校に教鞭をとることを禁じたので、法科などは教師陣が潰滅してしまった。こうした政府の強圧が早稲田の在野的性格を鍛えるのに大いに役だったことは、むしろ歴史の皮肉といってよかろう。「自由の精神、学の独立」という奔放不羈な早稲田精神は、大隈の土性骨と彼のよき協力者だった小野梓の見識から生れ、やがて学生の中に強烈な酒のようにしみこんでいった。早稲田の在野精神は、官僚の養成機関たる帝国大学では夢にもみられない清新な気風であった。

「まったく、『自由』と『独立』――ということばほど都合のいいものはない。門限があって十時になると門がしまったが、しかし、そんなものを飛びこすのはわけのないことだった。(何となればわれ等は『自由』であるが故である)」とは尾崎士郎の『人生劇場』の一節だ。ああ、何と調法な自由と独立！　たとえ、それが酒を呑み、吉原に女を買いにゆく自由と独立であったとしても、早稲田には一脈の反逆的ロマンチシズムが流れていたのである。

二つの在野精神　しかし、ひと口に在野精神といっても、大隈と福沢の立場には大きなへだたりがある。十四年の政変まで大隈は伊藤とならんで明治政府の大立物であった。政府のなかではもっとも進歩的な頭脳の持主ではあったが、身は廟堂の権勢に座していたのである。薩長のクーデターに足をすくわれて、はじめて彼は在野人となった。いわば環境によって余儀なくされた在野精神である。だから後にクーデターのときの第一の政敵だった黒田にたのまれると、

大隈はのこのこと出ていって外相となった。彼の反藩閥精神は、まず、このていどのもので、思想的背骨の不足をばくろしている。このてん、福沢の在野性は、もっと本物で、しんねりと根づよいものがあった。

福沢は「門閥制度は親の敵でござる」と『福翁自伝』に喝破しているが、この反封建的近代性ともいうべきものが、彼の在野精神の支柱である。彼が明治政府に参加しなかったのは、この近代性が、胸がむかつくように、役人根性に反撥したからにほかならない。政府は「役人と人民と人種の違うような細工をして」おり、「役人の仲間になれば、カラ威張りという醜態を犯さねばならぬ」、これは自分の堪えられるところではないと福沢はいっている。「天は人の上に人を作らず」云々の福沢の名句は、こうした猛烈な在野精神からうまれた。

福沢が当代第一の新知識を抱きながら役人にならなかったことは、まことに滑稽な誤解をうけた。「福沢は王政復古をよろこばず、故意に旧幕時代の年号を塾名に用いている」という政府の猜疑である。これは福沢が一時幕臣となった経歴と、塾の名をつけた慶応四年が、たまたま明治改元の年であったことからきた濡れ衣であった。この〝幕府の忠臣〟扱いはよほどおかしかったとみえ、自分は忠臣義士から凡そ縁の遠い人間だといい、かつて忠臣づらをした幕臣たちが、今では「しゃあしゃあと高い役人になって嬉しがっているのが私の気に喰わぬ。さてさて忠臣義士も当てにならぬ、君臣主従の名分論も浮気なものだ」と、榎本武揚らの旧幕臣の

豹変ぶりに痛烈な爆弾をなげつけている。

このように、福沢は封建性や藩閥にたいする本質的な批判者であった。しかし大隈のように迫害を受けなかったのは、終生政治にタッチしなかったからであろう。維新の大変乱のさいに、彰義隊討伐のいんいんたる砲声をききながら、福沢は悠ゆうとしてウェーランドの経済書を講じた。

この有名な逸話がしめすように、福沢は直接政治にタッチせず、民間の啓蒙思想家をもって己れの本分とした。藩閥とたたかうといっても、しょせん政治は修羅の巷である。インテリ福沢は政争場裡の泥にまみれることを欲しなかったのであろう。ばか者どもとは喧嘩しても始まらぬというのが、少年時代からの彼の処世術である。したがって高く時流を抜く見識をもちながら、時流と戦って傷つくことはしなかった。福沢にはこのような冷たい知性と貴族性がつきまとっていた。天は二物を与えず、この辺に彼のえらさもあれば限界もあるのだろう。

大隈はむしろ泥まみれの行動者だ。彼は生涯をかけて猟犬のように政治的野心を追った。ところが長い在野の不遇時代に、民衆政治家としての幅を身につけ、大衆とともに歩むことを学んだのは彼のプラスであった。村正の妖刀とよばれた青壮年時代の切れ味から、大隈の大風呂敷と呼ばれるケオス的包容力に変っていったのである。彼が国葬ではなく国民葬という形式で葬むられたことも、早稲田の学生に大隈のオヤジと親しまれたのも、この大風呂敷のおかげで

ある。

「大隈の中には一人の天才の頭が住んでいたのではなく、幾百万の凡人の心が住んでいた」という早大教授中谷博の短評は、まことに適切だとわたしは思う。大隈の偉大さは、質より量にあった。そしてこの庶民的、実践家的風貌は早稲田の学風にとりいれられ、慶応の貴族的、商人的風貌と鋭い対立を示すのである。

思想家福沢の名は、おそらく不滅だろうが、政治家大隈の名は、いずれは歴史の波間に埋もれるであろう。福沢が塾の経営に生涯をかけたのにたいし、大隈は政治に生涯をかけ、早稲田大学の経営はむしろ副業であった。競馬にたとえれば、大隈は馬主であって、騎手ではなかった。福沢は馬主であると同時に、騎手をもかねたのである。しかし、もし大隈の名が歴史に残るとすれば、政治家としてではなく、おそらく早稲田大学の創始者としての名前ではなかろうか。

早慶戦物語　早慶ライバル物語りのピークは、何といっても早慶野球戦であろう。早慶といえば早慶戦を頭にうかべ、早慶戦といえば、まず野球を思うのは天下の常識である。野球は大学にとっては余技かもしれぬが、天下の視聴は春秋二季の〃余技〃にむかって集中するのだからやむをえぬ。

早慶戦は明治三十六年にはじまり、三十九年に中断された。再開は大正十四年で、この間十

八年の大空白をのこしている。この空白の期間は、明治三十九年秋の第三回戦が戦わるべくして、ついに戦われなかったことに始まっている。不戦の理由はもし戦えば、血をみねば収まらなかったからであろう。

慶応の野球は明治十八年にはじまり、早稲田のそれは、三十四年に始まった。当時の球界の覇者は一高と学習院で、ことに一高は、外人チーム以外は対抗戦と呼ばず、一段格をさげて練習試合と称した。彼等は練習試合にはユニホームを着けないという奇妙なプライドのもち主であった。おそるおそる「練習試合相煩わしたく」という願書をさしだし、師弟の札をとれば、初めて相手にするという稚気満まんのお山の大将でもあった。ところが明治三十七年には早慶があいついで一高を撃破し、以後一高の覇業はくずれて天下の視聴は一転して早慶戦に注がれることになったのである。

この年には早稲田は一高、慶応、学習院をくだし、全勝の成績をおさめたので、かねての約束通りアメリカへ遠征した。早稲田野球部育ての親の安部磯雄が、全勝すればアメリカにつれていくと固く約束していたからである。ちょうど世は日露戦争のさいちゅうで、渡米計画は一笑にふされたが、親分の大隈は「戦争は、その方の係りがやっている。学生はそんなことに関係なく大いに見聞を広めて来るがよろしい」と胸をたたいて渡米費用をかりてきてくれた。かねて安部は彼の地のプロ野球戦の盛況を見聞していたので、渡米費用ぐらいは訳なく入場料で

とりかえせると考えていたらしい。それどころか、早稲田の近所を流れている江戸川をせきって一大プールを作り、ボートを浮かべて理想的遊園地とするという途方もない夢を描いていた。お人よしの安部は、職業野球とアマチュア野球の区別をしらず、向うに行きさえすれば、どんどん入場料がとれるぐらいに考えていたのである。

アメリカでは十九敗七勝、散ざんの不成績で、勝った相手はハイ・スクールの子供だけだった。しかし盗塁牽制やバンド戦法など、〃科学的〃な技術を仕入れて帰ってきた。そのころまでの日本の野球はすべて一高式で、たおれてのちやむの精神で猛練習をはげんだ。したがって大抵の投手は、練習で肩をこわした。なかでもバンドなどは卑怯未練のふるまいで、男子のなすべきわざではなかったのである。

話を前に戻すと、明治三十八年まで早稲田は四勝三敗で勝越していた。翌年の第一回戦は早稲田の戸塚運動場で行われ、二対一で慶応が勝ち、大隈邸の前で慶応側は万歳万歳を叫んで踊りまわった。第二回戦は三田側で行われ、復讐に燃える早稲田の応援団は前夜から芝公園にたむろして赤あかとかがり火をたいて夜をてっした。そのころの早稲田の応援団長は有名な彌次将軍吉岡信敬だった。顔じゅう髭にうずもれたこの快男児は、東都球界の名物男だった。横山健堂の『人と水』には「声援の雄者は吉岡将軍也。一声、一挙手、猛気発す。声援において将軍の尊号をかちえたる者は、彼の外、空前にして絶後ならん」と書いてあるほどだ。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com